

「地域資源を活用したオルタナティブ観光」

団体名●川澄研究室(経済学部)／代表者名●川澄厚志(経済学部准教授)

はじめに

2019年度「地域連携による地域貢献活動」推進事業の採択を受けて、「地域資源を活用したオルタナティブ観光」では、実証研究を試みている。本研究(事業)の主な目的は、奥能登地域及びその周辺地域の市民団体、NPO、大学・研究機関、行政が行っている地域づくりの取り組みを、各主体と共に「オルタナティブ観光」という観念から見直し、地域資源を観光学的分類から非移転性と有機的連鎖性を担保しつつ、地域資源の活用を提案することである。

1. 2019年度における活動成果

2019年9月14日(土)に志賀町旧西海小学校で実践された交流事業を通して得られた知見については、多方面にその成果をすでに公表している。①2019年10月、国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学主催の Matching HUB Business Idea & Plan competition (以下、M-BIP)への作品出展、②2019年11月、一般財団法人日本ホテル教育センター主催の2019年度(第9回)学生観光論文コンテストへの論文応募、③2019年12月、2019年度北信越学生インナー大会(於新潟大学)への出場、④2020年2月、金沢星稜大学経済学部主催のゼミナールコンテストへの出場である。その結果、①で佳作入選とオーディエンス賞(写真1)、③で優秀発表賞、④で優秀発表賞を受賞している。学生観光論文コンテスト論文等すでに公表している成果については次節で示す。



写真1 M-BIP「オーディエンス賞」受賞の様子

2. 交流事業の実践で得られた知見

藤井悠里ほか(2019)によれば、地域資源を活用した着地型観光のプログラムとして、2019年度まで継

続されているプログラムとそうでないプログラムがあることが指摘されている。継続されていないプログラムは、地域側からの協力を得ることが困難であったり、来場者からの評価が得られなかったりするものであった。一方、継続されているプログラムは次の通りである。地場産業であるスギヨファームとの連携が取れているぶどう狩り、志賀町の特産品として認められている桜貝を利用したさくら貝工房、地元公民館から尽力いただいている釣り教室である。これらプログラムが継続的に実施されている要因として、来場者評価が高く、地域特有である地域資源の再評価が適切になされていることが窺える。



図1 TOGIXのプログラム年表

当該交流事業において停滞する来場者数に対する今後の展望として、M-BIPにおいて「次世代が選択できる豊かな地域社会の構築～見る・学ぶツアーによる持続可能な地域づくり～ツアー」が提案された。このツアーの目的は、某旅行代理店の既存能登観光バスツアーとのマッチングにより、当該交流事業で関係人口の創出につなげていくことである。持続可能な地域づくりの担い手として、創造的に社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。

【参考文献】

・藤井悠里、向出安佑、石田裕美子、正城奈々美、長谷川真緒(2019)「域学連携による次世代が選択できる持続可能な地域づくり～廃校施設を拠点とした地域資源の再評価と活用の提案～」、2019年度学生観光論文コンテスト、日本ホテル教育センター